

セーラー服は、いつの間にか胸の上までめくれあがっていた。シンプルなブラジャーに包まれた乳房は硬いほどに張りつめて、男の手をぷりぷりと弾きかえしている。兄は、ブラのフロントホックを指先ではずした。

「きゃっ」

ホックがはずれた勢いで、カップが両脇に寄り、遠慮がちな大きさの乳房が揺れながら飛びだした。あお向けになっっているせいで、Bカップの乳房はいつそう扁平になっている。胸の谷間と脇の部分にはあばらが浮き、子供じみた雰囲気だ。

進也は、麓かむとのほうから絞りあげるようにして乳房を揉んだ。手のひら全体を使ってマッサージするようにして揉んでいく。内側のしこりがいつそう硬く張りつめた。薔ば薇のつぼみのような乳輪の上で、やや陥没気味の乳首が精いっぱい首を伸ばし、硬くしこつて男の手をツンと押した。

「やあつ。お、お兄ちゃん……あ、あんまり強くしないで、おっぱい、さ、さわられるの、やだ……い、痛い、から……」

梨緒は、眉根を寄せてせつない声をあげた。ふくらむ余地を残す乳房は、揉まれると少し痛い。

「そうか。悪い。若いほどおっぱいが痛いんだよな」

「やらしーの。どうしてそんなことを知ってるのよ?」

「常識だろ。男なら誰だって知ってると思うぜ」

梨緒は、頬を染めて目を伏せた。兄の口から出た「男」という言葉に触発されたのだ。義理の兄というのは不思議な存在だ。家族として一緒に暮らす、兄妹という名の赤の他人。血の繋がりは無いのだから、梨緒が罪悪感を覚える必要はないはずだ。

梨緒は、兄の胸をそっと押しあげると、自分からベッドの上に横たわった。小首を傾げて笑い、兄を誘う。進也は梨緒に添い寝する形で横たわった。めくれあがったセーラー服から、二つの乳房がのぞいている。ミニ丈のヒダスカートは、横たわる動作でめくれてしまい、太腿の上のほうでまっわっている。

中途半端にセーラー服をまとった、豊満とはとても言えない細い身体。平らなお腹と縦長のおへソ、形のいい膝小僧と、ぶるぶるした肉を丸くまとったやわらかそうな太腿。

セーラー服の濃紺が、はかないほどに白い肌をいつそう白く見せていた。ミルクを固めたみたいで、乳輪と乳首のピンク色が鮮やかに映えていた。

「私、お兄ちゃんが好きだよ。お兄ちゃんとしても、お兄ちゃんじゃない部分でも」  
緊張のあまり、多弁と沈黙を繰り返す小さな唇に、義理の兄がキスをした。



怖がって噛みしめてしまった歯を、熱い舌がねぶりだす。びっくりして口を開けると、進也の舌が口腔に忍び入ってきた。縮こまっている舌を誘うように舐めしゃぶり、深いキスを交わす。

「んっ……はあ……くちゅっ……ちゅぱっ……ん、くっ……ちゅるちゅる……んあ、ああっ……」

ディープキスは、魔法のように彼女を酔わせた。舌が痺れるようだった。梨緒の顔が、次第にとろんとしたものになってきた。熱く深いキスを受けっていると、頭の芯がくらくらし、手足の先が熱くなる。

「ん……はあっ……あっ……あっああっ……ちゅぷっ……んああっ……」

あまりに深いキスにとまどいを感じ、梨緒の手が迷うようにあがる。進也が梨緒の指に指を絡めるようにしてベッドに押さえつけた。さらに上半身を重ねるようにして、もがく彼女を絡め取る。

「くっ……ん、んんっ……ちゅっ……はあっ……ちゅぱっ……ちゅるるっ」

進也がようやく唇を離したとき、梨緒は強い酒に酔ったように、ほんやりした顔になっていた。

「はあ……」

進也は梨緒の鼻のアタマを指で押してふっと笑うと、キスを移動させていく。そして耳へふうと息を吹きかけた。

「きゃっ！」

電気のような信号が走り、たまらなくなつて首を振る。梨緒の白い喉を、髭剃りあとのざらざらがこする。肌が信じられないぐらいに感じやすくなつていて、進也のさわるところのすべてがピリピリと感じている。

「ん……ああっ……はあっ……んっんっ……ああ、お、お兄ちゃん……」

筋肉の発達していないやわらかい身体が、男の腕の下でぴちぴちと跳ねる。

進也は、梨緒の耳たぶをねぶりながら、片手で梨緒の脇腹や乳房、お腹のあたりを手のひらで撫でさすっている。その手が太腿の上に乗る、内腿を撫ではじめた。

「あ、いや……お兄ちゃん……」

思わず腕をあげると、兄の顔が腋の下に入りこみ、くぼみをぺろつと舐めた。

「きゃっ！ や、やだっ……いい、いや……汗くさいよ……そ、そんなところ……」

「汗くさくなんかあるもんか。いい匂いだ……」

腋の下を舐められるのだから、くすぐったくないはずがない。なのに、ゾクゾクした戦慄が背中を中心に向かって走っていき、細い身体が震えてしまう。